# 特集　第4回『言語力』大賞コンテスト

## 言語力大賞コンテストを終えて

第４回優秀賞受賞　　理工学部２年　　佐久間　愛香

私が今回の言語力大賞コンテストに応募した理由はほんの些細なものでした。

まずは私が膨大な日数の夏休みを持て余しかけていたこと。二か月も休みがあったら本好きの私はきっと毎日読書をして過ごすことになるでしょう。しかし読書にはお金がかかるのです。一日平均一冊としても単純計算で六十冊。私にはそんな財力も本を置く部屋のスペースもありません。ただでさえ「二階の床が本の重みで抜けて一階の居間がつぶれる」と母に呆れられているのに。

子供のころから本を読むのが好きだった私はいつの頃からか自分でも小説を書きたいと思うようになっていました。自分がわくわくして読んだようなお話を、いろんな人が楽しめる小説を、いつか自分でも書いてみたい。そんな風に思っていたのです。夏休みというのはそんな私にもってこいの状況でした。話を考えている間はきっと本を読んでいる暇もないでしょう。長い休みを楽しく過ごせる上に、これ以上蔵書も増えない。まさしく一石二鳥です。

そしてどうせ書くならどこかの賞にでも応募してみたい。私はそう思いました。今までも何度か文学賞などに投稿したことはありますが、さて今回はどこにしよう。そんなときに出会ったのが言語力大賞コンテストでした。枚数が十枚というのも書きやすいし、応募先が大学図書館というのも市内に住む私にとってはお手軽です。そしてなにより副賞がとても豪華です。図書券で渡されるそれは、財布の中身をほとんど本に費やす私にはすごく魅力的に思えます。夏休みを有意義に過ごせて、あわよくば図書券を手にし、また本を買う。そんなプランが目の前に広がりました。みしみし音がして今にも抜けそうな床のことは忘れ、私は机に向かいました。

今回応募する上で一番役に立ったのは弘前大学附属図書館のウェブサイトでした。過去の受賞作品も読める上に、その講評まで閲覧できます。これから同じように小説を書く者としてとても参考になるし、審査する側の気持ちにも立ってみることができました。初めは私も「いったいどんな作品が受賞しているのだろう」「自分は的外れなものを書いているのでは」と不安でしたが、これを見ることができてとても自信がつきました。賞に応募しない人でも、本を読むのが好きな人には読んでみてほしいと思うような面白い作品がたくさん掲載されていました。

図書館サイトのおかげで話を考えるところから書き終わるところまで、私はとても楽しんで

作業することができました。しかし一方で残念だったのは、言語力大賞コンテストの存在を知らない人が沢山いるということです。私が賞をいただいたというのを聞いて「そんなコンテストがあったのは知らなかった」「私も出したかったのに」という声がいくつも聞こえてきたのです。できることなら次回からは学内にもっとたくさんポスターを掲示するなどしてコンテストの知名度をあげ、いつか弘前大学の名物になればいいなと思っています。私もとりあえずは図書館のウェブサイトのことをみんなに教えて、閲覧するように勧めてみます。受賞作品を見た人が「あ、私も書けそう」と思ってくれるように。

（さくま　あいか）

# 第4回言語力大賞コンテストに寄せて

人文学部准教授　飯　考行

私の専攻は法学で、文学は主に古めの随筆を勝手気ままに好んで読む程度に過ぎない。審査委員として適任なのか心もとなかったが、他に文学専攻の委員がいらしたこともあり、大船に乗った気持ちで素人の視点から務めることにした。つまり、何の気なしに文字を追って、その作品に惹き込まれるかどうかにもっぱら基準をおくことに心がけた。

応募作の詰まった封筒を渡されて、研究室で紐解いてみると、三十余あり、家族、友人や恋愛関係の機微や感情を仔細に描いたいわゆる純文学のほか、メルヘン、サイコホラー、SF、歴史もの、ゲームストーリー、評論など、内容は多岐にわたった。夕食をとり、できるだけ気持ちをまっさらにして読み進めた。規定字数の制約のなか、惹き込まれる作品に出会えるのか不安もあったが、あにはからんや、心に留まる文章はいくつかあった。一読した印象のみでは奇抜な作品のみ印象に残る恐れがあるので、二、三度すべて読み返して、個人的な推薦作をピックアップした。

引き続いて、取り出した作品に順位をつける作業にとりかかった。この段階で、対象作は十指に満たなかった。後の委員会選考で優秀賞となった「彼女は海に帰った」は、何気なく読ませて奇抜さはないものの、フィクションとして抜きん出ており、登場人物の肌の白さ、プールの水色、同窓会での友人の茶髪など、舞台設定に応じた配色がさり気なく上手く、そのまま映像にできそうに感じた。同作にはもちろん高順位をつけたが、実のところ、その他の個人的な推薦作は、最終的に佳作に入ったものと入らなかったものに分かれる。受賞作は、全委員の総

意にもとづき、いずれも疑いなく素晴らしい内容だが、その他にも心に残る作品があったことは付記しておきたい。そうした日の目を見ない傑作を密かに味わえたことは、審査委員の役得と言うべきであろう。

委員会の選考過程を通じて、個人的に高順位をつけた作品が、他の委員から好評を得られないなど、自分の見る目に自信を失いかけ、文学的素養のないことがあらためて明らかとなった。この点には、私を含めた委員の年代と応募者の年代の時代感覚の違いも関わっていたかもしれない。ただし、独自に蓄えた感覚を文字に（誤字なく）表した作品は、テーマにかかわらず底光りし、複数の委員から票を得ていたように思う。メールやブログではお目にかかれない、自分自身で育んだ感性を活かしながら推敲を重ねた力作、時代を問わない言葉が、続々と生み出されることを期待したい。最後に、受賞者の皆さんはおめでとうございます、惜しくも落選となった皆さんは落ち込まずにまたチャレンジして下さい。

（いい　たかゆき）

## 「言語力」の可能性に挑戦しよう！

人文学部准教授　渡邉　麻里子

今年初めて、言語力大賞の審査をさせていただきました。私自身、改めて「言語力」について考えるよい機会となりました。三十数点の作品を読ませていただいた感想を記します。

文芸作品の部門では、大学生らしい素敵な作品が多いと思いました。それぞれの作品のテーマは、愛（男女の愛、親子の愛、兄弟の愛）、友情、未来への思い、幸福など様々で、人間の永遠のテーマと思えるものに、皆さんも普段、真正面から向き合っていることを実感しました。全体に、筆者の心優しい人柄を想起させる作品が多く、嬉しく拝読しておりました。

しかし一方で、読者への意識が欠けているように感じる作品もありました。確かに、何も挑戦しないよりは、「応募した」という積極的な意欲は評価したいと思いますが、自分の感情を一方的に吐き出し、書き捨てたようなものは、作品とは言えないと思います。提出した作品は、自分とは異なる他者に読まれる訳ですが、応募作品には、読者をどれだけ意識したか、疑念を感じるものがありました。誤字・脱字の多い作品は論外ですが、自身の感情を無雑作に表出し、その心情が受け取ってもらえるか、その表現が相手に伝わるかどうかという配慮に欠けた作品は、言い方は悪いかもしれませんが、自分勝手な作品だと思います。勿論、文芸作品の場合、

言葉を尽くして感情を伝えるということがすべてではありませんし、意図して抽象的な表現を選び雰囲気を作りあげることもありますが、それにしても、提出する前にもっと入念に読み直し、さらに推敲すれば、より素晴らしい作品になったのではないかと思えた作品があったことは、とても残念に思いました。

言語は、人と人との間で、何か――感情であったり、メッセージであったり――を伝えるために用いるものです。発した言葉は、相手に受け取ってもらって初めて意味が生まれます。受け取ってもらうためには、相手を意識しないといけません。どういう相手か、どういう立場か。相手は、自分とは異なる人です。会話でも、メールでも、電話でも、そして文章でも、相手を考えない言葉は、決して伝わらないと思います。どうすればより強く、より深く伝わるか、考えてみる必要があると思います。

実際、言いたいこと、思っていることを言葉で伝えることは、とても難しいことだと思います。私自身、自分の「言語力」の乏しさを常に感じ、悩み続けております。

しかし、言葉には無限の可能性があります。同じような表現に思えても、ほんの一文字、一言の工夫で、印象が全く変わります。受け手の立場を意識して、自分の文章を、より伝わるものにしていきましょう。

来年も言語力大賞は行われます。是非多くの学生さんたちに、「言語力」の可能性に挑戦していただけたらと思います。

（わたなべ　まりこ）

# 「言語力」大賞コンテストのあり方

２１世紀教育センター高等教育研究開発室教授　土持　法一

文学的評価でなく、教育的評価でもかまわないとの事前の説明を受けたが、学生からの応募作品を読みながら、とても自分の「力量」では評価できるものでないと、審査委員を引き受けたことを後悔した。何よりも、評価基準が不明確で、どの点を評価して良いのかわからず苦労した。幸い、順位だけで、評価点までつける必要がなかったので助かった。結局、「理解できる」という単純な物差しでしか評価できなかった。このような評価では、文学的素養を有しているかもしれない学生の資質を見逃してしまう恐れがある。

文学的作品の審査には、この分野に精通した教員から審査委員を選ぶべきで、該当する教員

がいない場合は、外部から審査委員を委嘱するなどの配慮が必要である。

今回のコンテストでは、文学作品部門と評論部門の２部門であったが、附属図書館主催の言語力大賞コンテストの「目的」には、「問題解決のための調査能力、論理的思考、説得力のある表現」さらに、「言語力及びコミュニケーション能力の向上を図る」ことも含まれているのであるから、更なる工夫・改善が求められる。大学における言語力を高めることを目的とするのであれば、「ブックレビュー」のようなものも望ましい。たとえば、本学の教員に学生に読んでもらいたい「ベスト１０」の書物をあげてもらい、附属図書館内に陳列し、学生に自由に選んでもらって、批評を書いてもらうなどである。これなら、多くの教員が授業で実践していることなので、審査委員としても加わりやすい。本コンテストは、「活字文化の日」に合わせて、本との出会いを学生に大切にしてもらいたいとの趣旨も含まれているのであるから、附属図書館の本に触れる良い機会である。

過去の審査委員からも指摘されているように応募期間が短すぎる。これでは優れた作品は生まれない。過去１年間に執筆した作品まで遡って応募できるように配慮すべきであろう。また、「ブックレビュー」だけでなく、「基礎ゼミ」など共同プロジェクト作品の提出も可能にするなど、本学の教育ニーズに合致した言語力大賞コンテストのあり方が求められる。

（つちもち　ほういち）

**第４回　弘前大学学生『言語力』大賞コンテスト　受賞者一覧（平成２０年度）**

応募総数３２点（Ⅰ文学作品部門３０点、Ⅱ評論部門２点）

| 部門 | 賞 | 学　部 | 学年 | 氏　名 | タイトル |
|---|---|---|---|---|---|
| Ⅰ　文学作品部門 | 大賞 | 該当作品なし | | | |
| | 優秀賞 | 理　工 | ２年 | 佐久間　愛香 | 彼女は海に帰った |
| | 佳作 | 人　文 | １年 | 西沢　瑞穂 | 母親のカガミ |
| | 〃 | 人　文 | ４年 | 浅野目　睦美 | ラジオの雨 |
| | 〃 | 人　文 | ４年 | 公平　克彦 | ノモスセイバー |
| Ⅱ　評論部門 | 該当作品なし | | | | |

受賞作品及び講評を、弘前大学附属図書館ホームページに載せていますので、興味のある方は是非ご覧ください。

［第４回受賞作品］　（下記 URL から、第１回～第３回にもリンクしています）

http://www.ul.hirosaki-u.ac.jp/guidetop/gengoryoku/gengoryoku4_sakuhin.html